卒業研究論文

地域言語の潜在可能性

前　田　晃　良*
（田中ゼミ）

本稿は地域言語の潜在可能性を分析するものである。地域言語と記憶やイメージの付加、標準語化と地域性の関わりに焦点をあて、記憶の過程における「地域言語」の機能と効果を分析する。研究目的は、第1に地域言語の有用性を調査・検証すること、第2に教育における地域言語の有用性を分析することである。研究方法は、第1に、先行研究の分析に基づき、言語の定義及び地域言語の機能と効果研究の到達点を明確にする。第2に、地域言語に関する質問紙調査を用いて、その機能と効果の実態を検証する。

その結果、研究成果（地域言語の持つ潜在可能性）として、第1に標準語よりも地域言語の方が記憶しやすいこと、第2に地域言語が相手に親しみを与えること、第3に標準語化によって地域性が失われる点を明らかにし、地域言語が持つ地域及び各学校固有の学習内容開発の可能性について示唆した。

キーワード：地域言語、方言、記憶、無意味つづり、記銘、イメージ、共通語化、地域性

第1章　研究の目的と方法

第1節　研究の目的

本研究の目的は、以下2点である。第1に地域言語の有用性を調査、検証することである。地域言語とは、特定の地域でのみ使用される特定の言語を指す。この地域言語は、地域によっては過去に「方言札」などを用いて弾圧された経験があるにも関わらず、今なお息づく生命力の強い文化として認識されている。この文化としての地域言語が今日ではメディアの普及により「標準語化」されてきている。本稿では、第1に地域言語の潜在的な可能性、特に親しみと地域言語の関連性、記憶と地域言語の関連性について調査・検討する。

第2は教育における地域言語の有用性を分析する。地域言語は幼少期からその地域で生まれてきた証でもあり、それぞれの地域に誇れる文化とされる。しかしながら教育の場で提供される地域言語の知識は「それぞれの地域の人の気持ちを一番正確に伝えられる言葉である」ということに限定されている。これだけでは、当該知識を提供された児童も地域言語の重要性を認識しない可能性がある。以上から、本論文では「地域言語の潜在的可能性」について論じる。

第2節　研究の方法

（1）質問紙の内容

本研究は、アンケート調査及び文献研究を基盤として行う。アンケート調査は「方言（地域言語）に関するアンケート」、「記憶テスト」及び「記銘テスト」の3種類である。

第1の「方言（地域言語）に関するアンケート」は、方言に対する考えを質問する内容となっている。本アンケートにて、自分と同じ地域言語を話す人に対して親しみを感じるか、自分とは違

*平成24年度卒業生

う地域言語を話す人に対して親しみを感じるか、といった問いを設けることで、地域言語そのものに親しみのイメージ付加作用があるのか、それとも親しみのイメージ付加作用は同じ地域言語を話す人だけに制限がかかってしまうのか、すなわち、親しみと地域言語の関連性を調査した。

「記憶テスト」は、一つのテストに一つの地域言語を使用し、それを回答者に記憶してもらい、その後複数の質問に答えてもらう形式で行った。テストにおける地域の選別は、回答者を募った大阪大谷大学が大阪府に位置しており、大阪府近辺から通学していることを考慮し、大阪府周辺の4地域とした。

「記銘テスト」は、一つのテスト上で複数の地域言語に目を通してもらい、どの言葉が一番印象に残ったか等の質問に答えてもらう形式とした。地域の選別は、記銘テストで使用する地域言語を近隣の地域から選択すると回答者の既知の言葉が複数存在してしまうことが予測できたため、記憶テストで使用する近畿地方以外の地方から一つの都道府県を選別した。都道府県によっては地方ごとに使用する地域言語が異なる場合があるが、今回は一つの地域につき一つの地域言語とした。

(2) 実施方法

アンケートの回答者は同じ大学に通う21歳～22歳の男女を対象に30名の回答を募り、それを集計・分析することとした。一回に2名から最大で7名で数回に分けてアンケートを実施、出身地域は大学の所在地域の特性上、関西圏が多くなってしまったが、なるべく多くの地域の回答者を集めるように配慮した。環境は完全な静寂を選ばず、ある程度の雑音、喋り声の聞こえる、実際の日常的な教育環境に似た環境を設定した。記憶テスト・記銘テストはそれぞれ10秒・5秒の記憶時間を正確にタイマーで計り不正防止に努めた。

以上、本研究では、主に質問紙調査の実施・分析・検証を通して、地域言語の潜在的な可能性を分析した。

第2章　地域言語・標準語・共通語の分類と可能性

第1節　言語の定義

(1) 地域言語の定義

まず、本研究の前提である定義を明確にしておきたい。地域言語とは地方によって差異のある語句や音韻・文法のことであり、一般的には「方言」と呼ばれる言語要素のことである。早野(2007)は、多数みられる方言の定義を概観し、以下2つの解釈に分けて整理している[1)]。第1はシンドイ、メンコイのような全国的に使用されることのない地域差のある（地域的に制限された）珍しい語句（特に語彙）である。しかし、地域差のある言語要素は語彙に限らず、音韻・文法など、さまざまな言語的側面に存在する。方言は、ひとつには地域差のある個々の言語要素の意味で使われるとする。

第2は、方言が国語学や日本語学の概説書に「方言は全言語体系をさす」のように表現されている点を指摘し、地域言語の総体、地域言語全体の意味で使用される点を指摘する。

本研究では前者の地域差のある言語要素と定義する。なお、前掲で早野は社会言語学においては地域差だけでなく使用される場面差によって分類する立場もあるとも述べているが、今回は場面差を考慮しないこととする。

(2) 標準語の定義

次に、地域言語と対照的に使用される標準語の定義を示したい。標準語という言い方が一般化したのは明治20年代で、外国に向けての日本国のことばという点以上に、当時、国民国家として国を統一するための象徴として計画されたものが標準語であった。標準語とはどの地域においても通じる言語と認知されているが、世間一般には東京

の地域言語が標準語と認知されている場合が多い。公の場で使われる日本語は多くの場合この標準語にあたる。

(3) 共通語の定義

第3に、どの地域においても通じる言葉と認知されている言葉として、共通語という概念もある。標準語と共通語については学問的に区別の仕方はさまざまであり、柴田は、標準語と共通語を、前者を理想、後者を現実と区別し[2)]、真田は国語教育における標準語と共通語はその内実はほぼ同じと指摘する[3)]。しかし、両者はその指し示す概念が大きく異なる。共通語とは、原義的には、異なった言語間のコミュニケーションに使われる第三の言語のことをさすが、定義するとすれば、生活環境や方言の違う人たちが、全国どこに行ってもお互いに通じ合える言葉であり、アクセントの位置や発音の仕方など、あまり厳密なことは要求していない。すなわち、「お互いが通じる言葉」といえる。

学習指導要領において、1951年以降は標準語ではなく共通語という定義が使用されるようになった。そのため、現在の教育現場においては「標準語」よりも「共通語」という言葉が使われることが多い。しかし、共通語というと正しいただ一つの日本語のように考えられがちだが、実際は地域性を反映したいくつもの共通語が存在されている[4)]。「共通語」はあくまでその機能や役割をさしており、言語の構造的概念と機能的概念の曖昧さがそういった事象を引き起こしている[5)]。以上から、本研究では言語を体系としてとらえる場合には「標準語」という用語を用いる。

第2節　仮説の設定

本研究では以下の3つの仮説を設定する。第1は「標準語よりも地域言語の方が記憶しやすい」という仮説である。本観点を仮説とする根拠は以下2点である。まず、現在の認知心理学において、記憶とは主に「記銘（符号化）」「保持」「想起」という3つの要素に区分される。この中の「記銘（符号化）」という、絵や音など、外部環境からの情報を五感などを通して知覚する過程において、我々が全く知らない情報を記銘するよりも、多少知っている情報や身近な情報を記銘することのほうが容易である、という法則がある。これをこの仮説の根拠①とする。

次に、「標準語に比べて地域言語の方が身近な言語である」という点である。我々が生まれて最初に聞く言葉や、覚えていく言葉はその地域が標準語を話していない限りそれは地域言語であり、地域言語が最初に習得する第一言語となる可能性が高い。こういったことから、メディアや教科書で使われている標準語に比べ、地域言語の方が身近な言語であると考えられる。この考えを仮説の根拠②とする。

第2の仮説は「地域言語は相手に親しみやすさを与える」ことである。私たちは見知らぬ人や他人と話す際、多くは標準語もしくはかしこまった口調で話すことが多い。このように、場面や相手などの状況に応じて地域言語とかしこまった口調とを使い分けることをコードスイッチングという。このことから「標準語（かしこまった口調）＝人と距離をとった言葉」という法則が成り立つことが考えられる。反対に地域言語を使用する場面を考えると、友人との会話や、家族内での会話等が挙げられる。これらは身近な人であり、親しみを感じている相手である。従って、このような場合は「地域言語＝親しみを感じさせる言葉」という法則が成り立っていると考えられる。このため、「地域言語は相手に親しみやすさを与える」という仮説を立てるに至った。

第3の仮説は「標準語化によって地域性が失われる」ことである。地域性とは、その地域における特色、つまり特産物やその地域独特の文化や習慣である。これらの中に地域言語も含まれるが、この地域言語が標準語化され、その地域から失わ

れることで、地域言語という文化が失われる可能性がある点である。

こういった考えの背景には「祖国＝国語」という概念がある[6]。これはそれぞれの地域に生きる人々の本質・アイデンティティは、血の純粋性や国土という枠組みにあるのではなく、国語の中に生きている、つまり地域の言葉（＝地域言語）の中に生きている、という考え方[7]である。このことは、それぞれの地域に生きる人々が作り出した地域性（＝それぞれの地域に生きる人々の本質・アイデンティティの塊）は、各地域の国語、すなわち地域言語が生み出したという解釈である。すなわち、地域性の生みの親であるそれぞれの地域の国語（＝地域言語）が失われることは、地域性の喪失へとつながることを指摘出来る。以上から、「標準語化によって地域性が失われる」といった仮説を立てた。

第3章　先行研究の分析

第1節　記憶

(1) 記憶の研究

すでに指摘した通り、記憶は「記銘（符号化）」「保持」「想起」といった3つの要素から構成される。端的に述べるのであれば、情報を貯蔵し、検索するシステムである。記憶研究では、科学的な記憶研究の第一人者であるヘルマン・エビングハウスの研究、及びそのエビングハウスの研究法を批判したフレデリック・バートレットがある。エビングハウスはまず、人間の記憶のような複雑な問題に取り組むには、問題を単純化する必要があると考えた。エビングハウスは自分自身を被験者とし、新しい情報の学習課程の分析を試み、日常の経験などの既存の知識の影響を最小限に抑えるための「無意味綴り」と呼ばれる全く新しい学習素材を考案した。

1930年代において、当時使用されていた無意味綴りは有意味な連想語を喚起する頻度によって分類され、連想の生起確率が高ければ高いほど、学習される確率が高くなることを示した。無意味綴りは意味内容を欠いたものとして選ばれているが、どうしても連想を喚起してしまうものなのである。また、現実生活において無意味なものを学習されることは少ない。従って、無意味なものに関する記憶の心理学の価値は限られている、といったことも無意味綴りではなく、記憶の研究において有意味な単語が使用されていった背景の一つでもある。

エビングハウスはこの無意味綴りといったそれほど有望ではない材料を使ったにもかかわらず、あるいは用いたがために、科学的に記憶を研究できることを証明した。エビングハウスは当該研究において以下の概念、仮説、効果を示した[8]。

- 忘却曲線

忘却は、最初は急激に起こるがやがて緩やかになること、忘却率は直線的ではなく対数的になるといった法則[9]。

- 総時間仮説

学習量は学習に消費された時間の関数であり、学習する時間を2倍にすれば、貯蔵される情報量は2倍になるという単純な規則[10]。

- 分散学習の効果

学習試行は集中的に行うよりも、一定期間中に分散した方が効率的であること[11]。

次に、エビングハウスの研究を批判したバートレットの研究を取り上げたい。人間の記憶という、複雑極まりないシステムを理解するという困難な課題を、取り扱いやすい下位課題に変えるという点でエビングハウスのように単純化した課題を厳密に統制した条件の下で慎重に測定することは利点があった。また、このような実験方法は、記憶研究を実験的に行なうに当たって不可欠なことであり、科学的な記憶研究の重要な特徴であることに変わりはない。このように取り扱いやすい

問題から着手しようという気がなければ、進歩は望むべくもない。しかしながら、こういったアプローチには人間の記憶の中で最も重要なもの、特徴的なものを実験から切り捨ててしまうという危険性が常に潜んでいる点を指摘した。実際、エビングハウスの実験では、記憶の情報処理的アプローチや、記憶の方略の使用、被験者の認知構造の影響、検索手がかりの機能においては切り捨てられてしまっていた。従って、無意味綴りに対する記憶を完全に理解したとしても、実験室の外で記憶がどのように働くかについては、依然として不明である可能性を以下のように指摘した[12)]。

> 無意味綴りの学習に関する研究からわかることはせいぜい反復習慣に過ぎない、意味を排除することによって、エビングハウスは人間の記憶の最も中心的な特質を追放してしまった。

バートレットは、無意味綴りの伝統を批判し、比較的自然な条件の下で意味の豊かな材料を使い記憶内容の時間的変容をテーマとして研究を行った。記名材料として図形や物語を用いて、保持時間中にその図形や物語の内容がどのように変化するか調べ、被験者の想起した図形や物語は、もとのままではなく、被験者の持っている認知構造に基づいた強調、及び平均化の過程で変容することを示した。彼はエビングハウスが排除しようとした人間の認知的過程が記憶の保持にどのような影響を及ぼしているのかを取り上げ、その影響が大きいことを明らかにした[13)]。

第 2 節　記憶力と地域言語の関係

エビングハウス、バートレットの研究成果は、以下 2 点を指摘している。第 1 に被験者が使用しない地域言語は、その被験者にとって無意味綴りと近いもの、もしくは同等のものと言える点である。無意味綴りの定義は、アルファベットの「子音 - 母音 - 子音」の系列からなるもので、発音できるが意味を持っていないという性質を持つ単語である。ここで重要な部分はこの意味を持っていないという箇所である。被験者が使用していない地域言語は発音できるが意味を持たず、無意味綴りと同等のものである。しかし、それは一定の連想を喚起してしまう場合もある。実際、今回のアンケート調査中も記憶違いや、別のものを連想するとの感想を得た。被験者が使用しない地域言語はエビングハウスの指摘通り、無意味綴りに限りなく近いということが考えられる。そして、この仮説に基づき、エビングハウスによる「総時間仮説」や「分散学習の効果」も同等のことが指摘出来よう。

第 2 は標準語よりも地域言語の方が深く学習できている点である。生後すぐに聞く言葉、また生まれてからこれまで、より多く聞いてきた言葉は標準語と地域言語のどちらであるか。ほぼすべての人は後者と答えるだろう。つまり、人は標準語よりも地域言語を聞く機会の方が多い。言葉を聞く機会が多いということは、それだけその言葉を学習する機会が多いことを示す。これは一つのことに関して何度も学習することであり、分散学習に近いものである。このことは、単純に学習機会が多いだけでなく学習する総時間も長い。つまり総時間仮説、分散学習の効果にあてはめた場合、標準語よりも地域言語の方が深く学習できていると言える。そして、学習できているものの再生確率は非常に高くなる。実際学校生活で行われるテストにおいては十分に学習した上で臨んだ方が高得点を獲得することができる。

先行研究が示した以上 2 点の指摘が示す通り、人間は自身が通常使用している地域言語の方が再生されやすく、結果的に記憶の補助となりえると言えるのである。

第 3 節　地域言語の持つ特性

地域言語の特性を端的に述べるのであれば、そ

れぞれの地域の人の気持ちを一番正確に伝えられることである。地域言語は人によっては「田舎くさい」と感じる人がいるかもしれない。あるいは「かわいい」と思う人もいるかもしれない。それは各々の感性に基づくため、多様な解釈がある。方言が好きという人もいれば、反対に方言が嫌いだという人がいて当たり前である。人はそれぞれの感性を尊重しつつも、地域言語を話し、そして聞く。

では、地域言語の特徴及び性質をもう少し掘り下げて考えてゆきたい。本言語は大きく2つの特徴を持つ。結論を先んずれば、第1は「意志疎通のツールとしての地域言語」、第2は「地域言語自体が特定のイメージを持つ」点である。

まず、第1の「意志疎通のツールとしての地域言語」から説明したい。地域言語は世間一般の用法とは異なるコミュニケーションツールとして利用される場合がある。それは各地の地域言語を組み合わせて使用するもので、一部首都圏の女子高生ではそういった地域言語の使用がブームとなっていた。例えば、「なまらせからしか」「ちかっぱめんこい」などである。これらの「なまら」と「せからしか」はそれぞれ北海道と九州でみられる言葉で、「ちかっぱ」と「めんこい」は博多と東北でみられる言葉である。首都圏に住む女子高生が、意志疎通に自らが所属する社会から遠くは慣れた地域の言語を用いたコミュニケーションを行うのである。

では、彼女らは、なぜ所属外の地域言語を使用するのか。そのメリットとして以下3点が指摘出来る。第1は「暗号化」である。使用者が住む地域外の地域言語を使用することで、周りの人は会話の内容を理解出来ない。いわば地域言語が暗号の役割を果たし、仲間内だけでの意志疎通を行うことが可能となる。事実、先ほどあげた例のひとつである「なまらせからしか」の意味は「なまら＝とても」「せからしか＝騒がしくて、いらいらする」といった意味であり、周りにとってはマイナスな内容である。このような内緒話をする、という点で地域言語は有効な手段となる。

第2は「新鮮味、心を和ませる何かがある」点である。人たちは絶えず新しいものを探し、自分たちの感性に合った使い方をしたいという欲求を持ち、その欲求を満たすために地域言語を自分なりの感性に合わせて利用している。また、方言は新鮮味だけでなく語感やことばのひびきによる普通の言葉には無い心を和ませる要素を持ち、それを取り入れようと試みた結果とも考えられる。

第3は「アイデンティティの確認」である。これは、自分の用いる言語や方言の種類は自分が何者であるかという問いに対しての答えとなり得る、ということである。例えば旅先で自分と同じ地域言語を話す人に出会ったときに仲間意識や親近感を感じたりするのはこのためである[14)]。

地域言語の第2の特性は「地域言語自体が特定のイメージを持つ」点である。話者に対し、何かしらのイメージを付加すると考えられる地域言語。その地域言語が付加するイメージは地域言語自体が持つイメージに大きく関係している。そこで、自県出身者（ネイティブ）と、そうでない者（ノン・ネイティブ）が持つ地域言語のイメージの調査資料[15)]をもとに分析した。

先行研究では、ネイティブ、ノン・ネイティブそれぞれの活躍層のイメージ（きれい・丁寧・良いことば・味がある・素朴・表現が豊か・早口・聞き取りにくい・きつい・汚い・荒っぽい・悪いことば・やぼったい・ねばっこい・感情的・まのびしている・親しみやすい・おだやかの18項目）が、札幌・弘前・仙台・千葉・東京・松本・大垣・金沢・京都・広島・高知・福岡・鹿児島・那覇の14地域別にグラフ化されている。特筆すべきことは、地域によってその地域で使われている地域言語のイメージが異なる点である。しかし、ネイティブとノン・ネイティブの間において、さほ

どそのイメージに大きな差が開いていない点を踏まえると、各地域言語が一定程度固定化されたイメージを基に出来上がっているといえるのかもしれない[16]。

では、一定程度固定化された地域言語のイメージはどのような性質を持っているのだろうか。井上は、方言イメージが言語と文化をつなぐ典型的な中間項であり、背景にある地域文化と深く関わるものであることを指摘する[17]。これはその方言が使われる地域の文化的イメージを方言イメージが代替している点の指摘である。つまり方言イメージは方言そのものだけでなく、方言の背景にある文化への総体的判断という面を持ち得るということである。また方言イメージは、その方言を使用する地域や住民に対してのイメージであることも多いとされる。近年では TV 番組でもそれぞれの都道府県民の人柄や文化が違うことに注目した番組も存在しており、いわゆる県民性といったことに関心の多い人が増え、それぞれの地域へのイメージが浮かびやすくなっていることも原因かもしれない。このようなイメージが方言イメージとして地域言語の話者へイメージを付加していることが考えられる。そういった点から、方言イメージについても一定程度、マスメディアからの影響を受けていることが考えられる。

方言には文化や地域性などと関連したステレオタイプのイメージが付随しており、不平等な格付けを受けている場合もある。また、このイメージはパーソナリティの特性だけでなく、対人対応、知性教養、外見、経済的要素、職種イメージまで付随される。こういった不平等な評価が方言コンプレックスを生み出す要因の一つとなっているのであるが、これは主にマイナスイメージとしての方言イメージが原因となって起きている。各種メディアがプラスの方言イメージを発信することで、このような方言コンプレックスに打ち勝つ可能性があるかもしれない。この方言コンプレックスは、近年の共通語化により薄れてきているという報告もある[18]。しかし、方言イメージはその方言を使う地域文化への総体的判断という面を持っている。そんな一面を持っている方言を中和していく共通語化が方言コンプレックスを緩和することは、あまり有意義とは言えないだろう。

第 4 節　共通語化

近年、「方言はあまり使われなくなった」「方言は近いうちになくなるだろう」などの語りがある。テレビを中心としたマスメディアの発達により、我が国の地域社会の言語生活には、若い世代を中心に急速に共通語が浸透しつつあり、それが方言の消滅を促しているという言説である。このように、マスメディアの影響を受けて地域言語が徐々に共通語に浸食されていく現象を共通語化という。

しかし、全国各地の方言はただひたすら共通語化に向かっているわけではなく、今なお根強く使用されている方言も多く、今後も共通語との共存の中で生き続けていくに違いない、方言はなくならない、といった見方もある[19]。

上で共通語化について述べたが、言葉には複数の伝播パターンがあり、このパターンに従って共通語化等の言葉の変化が起こることが指摘されている。言葉の伝播パターンは以下 4 種類である。

①都市の威信・威力（方言集圏論）
②言葉の内部事情→言葉の安定化
③その他の圧力→政治圧力などによる規制
④地方の威信・威力（逆集圏論）

①は主に都市の威信・威力によって周囲の地域が都市の言葉を使用するといったもの、または地方の都市に対する憧れなどからおこるものである。例を挙げるならば、大阪の芸人を真似て関西弁を使う、といったものである。②は発音しにくい場合などに言葉が安定を求めて、文字が少なくなったりすることで起こるものである。③は政治

的圧力による規制などで、過去の「方言札」などが該当するだろう。④は①の反対で、地方で使用されていた言葉が利便性などにより、都市においても使用されることで起こる伝播である。言葉は、この4パターンで伝播すると考えられている。この伝播パターンの中で特に本研究で取り上げたいのはパターン①である。このパターンは都市である東京の言葉（世間一般で言う標準語）から伝播するパターンも含まれている。このパターンを本研究では共通語化ではなく、狭義の標準語化と定義する。

言葉の伝播パターンとして、好意を寄せている方言を積極的に取り入れようとする点、地方は比較的、都市に対して憧れを持っており、都市の言葉に好意を持っている点が指摘されている。このことは、共通語化が進みやすいことを示している。しかし、反対に共通語化の進行を阻むことができる可能性としてパターン④がある。先ほど述べたように、これは利便性などが原因で地方の言葉が都市において使われる伝播パターンであるが、ここにパターン①が併合することで、過去に失われたはずの方言が息を吹き返したケースもある。このようなケースがこれからも起こり得ると考えるのであれば、共通語化によって完全に地域言語が失われる可能性は少ないかもしれない。

しかし、地域言語の復活には問題点もある。それは、その地域の方言として息を吹き返しても、その地域の住民は息を吹き返したと考えていない点である。なぜなら、その言葉は一度なくなり、都市で息を吹き返した上で、地方に持ち込まれる、という経路を辿るため、地元の言葉というよりも、都市の言葉と意識することになってしまうからである[20]。これでは本当の意味で方言が息を吹き返したと言う事は出来ない。このような意味において、共通語化によって完全に地域言語がなくなることはない、とは言い切れないのである。

近年、文化の観点から、マスメディアや行政において、地域言語の社会的意味が見直される傾向がある。事実、近年は地方の言葉を頻繁に各種メディアで目にする機会が増えている。先に挙げた「県民性」に注目したTV番組もその一つである。これらの流れを汲み、現在では文化庁において、地域言語を地域文化の一つとして位置付けている。これらは地域言語が存続していくことに関して大きな影響を与える動きであろう。

しかし、未だ地域言語の活用法については検討を重ねる必要がある。例えば、地方自治体において、広報などには地域言語を使用できるが、公的な計画文書においては使用できない、という問題が指摘されている。これは地域言語が元来話し言葉である点や、移民、移住者等を考慮した場合、言葉の理解が困難であることから、公平さに欠けるという点である。実際、いくら共通語化が進んでいるとはいえ、まだまだ原型を残している地域言語は数多くある。地域言語を利用して全体で共通の理解を図るということは難しい可能性がある。以上の点から、標準語や共通語、地域言語のそれぞれの役割に合った使用方法を教育現場などにおいて、教授していく必要があるのではないだろうか[21]。

第4章　可能性の検証

第1節　地域言語と記憶

以上を踏まえ、本研究では記憶と地域言語の関連性を知るためのアンケート調査を30名に対して実施した。アンケートは、3部構成で作成した。第1部は、回答者の出身地、両親の出身地など、回答者の背景を尋ねる質問を構成した。第2部は、地域言語の好き嫌い、教育における地域言語の有用性、標準語化と地域性の問題等、地域言語と文化について尋ねる質問を構成した。第3部は、記憶調査のテストを構成した。テストは、地域ごとに8つの言葉を列挙し、各頁10秒間でそ

の言葉を記憶してもらう。その上で、次ページにおいて記憶に残っている地域言語、及びその意味を尋ねる質問を構成した。アンケートは、計24頁であり、回答時間は15分程度を想定した。

結果の分析方法は、回答結果を出身者毎に5つのグループへ分類・集計し、結果の比較を行った。分類は、①両親が大阪府生まれである大阪府出身者（以下、「大阪Ⅰ」とする）、②①以外の大阪府出身者（以下、「大阪Ⅱ」とする）、③和歌山県出身者、④兵庫県出身者、⑤その他の都道府県出身者とした。この分類に基づき、テスト4ケースの正答率と認知度の関連性、各分類間の差について比較、分析を行った。以下にてその結果を提示する。

表1　大阪Ⅰ　記憶テスト個別回答（記憶個数）

	回答者番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦			平均	正答率／認知度
地域言語の種類	和歌山	6	2	3	4	3	2	1			3	38％
		1	1	2	0	3	0	0			1	13％
	京都	2	4	4	4	3	4	4			3.571428571	45％
		2	1	3	2	3	2	1			2	25％
	大阪	6	3	5	4	4	3	3			4	50％
		6	3	5	3	4	1	3			3.571428571	45％
	兵庫	3	2	3	3	3	2	1			2.428571429	30％
		1	0	0	0	0	0	0			0.142857143	2％

表2　大阪Ⅱ　記憶テスト個別回答（記憶個数）

	回答者番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	平均	正答率／認知度
地域言語の種類	和歌山	2	1	2	5	5	3	4	3	2	3	38％
		1	0	1	3	3	2	3	1	1	1.666666667	21％
	京都	2	4	2	4	4	5	4	3	3	3.444444444	43％
		1	3	2	3	4	4	2	1	1	2.333333333	29％
	大阪	3	1	3	5	5	4	3	3	3	3.333333333	42％
		3	1	3	4	5	4	3	3	3	3.222222222	40％
	兵庫	2	1	2	3	2	2	3	2	2	2.111111111	26％
		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0.111111111	1％

表3　和歌山県　記憶テスト個別回答（記憶個数）

	回答者番号	①	②	③	④						平均	正答率／認知度
地域言語の種類	和歌山	6	3	3	2						3.5	44％
		5	3	3	1						3	38％
	京都	4	4	6	4						4.5	56％
		4	2	4	1						2.75	34％
	大阪	3	3	5	6						4.25	53％
		3	3	5	6						4.25	53％
	兵庫	2	3	2	1						2	25％
		1	0	1	0						0.5	6％

表 4　兵庫県　記憶テスト個別回答（記憶個数）

	回答者番号	①	②								平均	正答率／認知度
地域言語の種類	和歌山	3	2								2.5	31％
		1	1								1	13％
	京都	4	3								3.5	44％
		2	2								2	25％
	大阪	3	4								3.5	44％
		3	4								3.5	44％
	兵庫	4	2								3	38％
		0	0								0	0％

表 5　その他　記憶テスト個別回答（記憶個数）

	回答者番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		平均	正答率／認知度
地域言語の種類	和歌山	6	3	2	3	3	4	6	3		3.75	47％
		3	3	1	1	2	2	3	2		2.125	27％
	京都	7	2	3	4	3	3	6	5		4.125	52％
		4	0	3	3	3	1	5	2		2.625	33％
	大阪	5	3	3	3	3	3	7	2		3.625	45％
		5	3	3	2	3	2	5	2		3.125	39％
	兵庫	5	3	2	1	2	3	4	2		2.75	34％
		1	1	0	0	1	1	1	0		0.625	8％

表 6　再生率調査

全 30 人中	和歌山県紀北地方							
	おもしゃい	いらう	おっぱ	きつかいない	さぶいぼ	しゃるく	にえる	みずせった
回答人数	5	0	23	2	0	4	3	6
再生率	17％	0％	77％	7％	0％	13％	10％	20％
全 30 人中	京都府							
	あじない	いぬ	いかい	ばっちい	ほかす	ぎょうさん	どべ	まどう
回答人数	15	11	13	0	0	0	1	2
再生率	50％	37％	43％	0％	0％	0％	3％	7％
全 30 人中	大阪府							
	ごつい	やかましい	ほったらかす	どんくさい	いちびる	えげつない	せく	ぬかす
回答人数	1	0	0	0	2	0	1	1
再生率	3％	0％	0％	0％	7％	0％	3％	3％
全 30 人中	兵庫県但馬地方							
	ありこまち	あだぐち	あじこい	うつかつ	おがみむし	わや	あっかえ	あずる
回答人数	8	4	20	4	5	11	3	6
再生率	27％	13％	67％	13％	17％	37％	10％	20％

表 7　認知度・使用環境度

認知度	全体	30					
	大阪Ⅰ	大阪Ⅱ	和歌山	兵庫	その他	計	認知度
記銘テスト①	3	6	4	0	6	19	63%
記銘テスト②	6	7	3	0	6	22	73%
記銘テスト③	6	7	4	1	6	24	80%

使用環境度	全体	30					
	大阪Ⅰ	大阪Ⅱ	和歌山	兵庫	その他	計	使用環境度
記銘テスト①	3	6	4	0	3	16	53%
記銘テスト②	2	2	1	0	4	9	30%
記銘テスト③	6	7	4	1	6	24	80%

表 8

		1 当てはまる	2 まあまあ当てはまる	3 あまり当てはまらない	4 当てはまらない
⑥	自分と同じ地域言語を話す人に親しみが湧くか	83%	10%	3%	3%
⑦	自分と違う地域言語を話す人に親しみが湧くか	37%	40%	17%	7%

(1) 正答率と認知度

表 1～5 は、縦列に各地域別の記憶テストにおける正答数と認知個数を順番に記入し、横列はそれぞれの回答者を表した。表 1 からは、大阪出身者が大阪の地域言語の正答率が 45% を超え、他地域の地域言語よりも記憶に残り、その意味も把握出来ていることを示している。すなわち、第 1 に「言葉の認知度と正答率には関数的な関係がある」点、第 2 に「他の地域言語よりも自分の地域の地域言語の方が記憶しやすい」といったことを指摘出来る。これらは、前章の先行研究の分析通り、普段使わない意味の分からない地域言語は、エビングハウスの実験においての「無意味綴り」と同等の効果を持っており、普段使用し、意味の分かっている自分の地域の地域言語のように、普段の日常のエピソードと関連付け易く連想しやすいため、想起・再生されやすいことが実際に証明されたと言える。

しかし、表 2～表 5 は上述したような結果は得られなかった。表 2～表 5 を分析すると、どの表においても京都府の地域言語を使用した記憶テストの正答率が高い。自身の出身地と地域言語の正答率に相関はあまりみられず、出身地と異なる場所の地域言語であっても、京都府の言語を比較的記憶、理解していることが分かる。このことから、今回使用した京都の地域言語は「無意味綴り」であったにもかかわらず、他の言葉を連想させる地域言語が多く含まれていた点が指摘できる。

本研究では、連想を生起する言葉を分析するため、各テストにおいて「意味を知らない」と答えた単語の再生率を表 6 に示した。各言葉における再生率の順位を付けた場合、1 位「おっぱ（和歌山県紀北地方）」、2 位「あじこい（兵庫県但馬地方）」、3 位「あじない（京都府）」、4 位「いかい（京都府）」5 位。「いぬ（京都府）」同率 5 位、「わや（兵庫県但馬地方）」となっており、3 位以下を京都府の地域言語が占めていることがわかる。このことから再生率の高い京都府の地域言語は今回の回答者にとって連想を生起しやすい無意味綴りと同等の効果のある地域言語であったことが分かる。よって、表 2～5 において言葉の認知

度が低かったにもかかわらず、京都府の地域言語を使用したテストの正答率が一番高かったことは、当該地域言語が持つ連想という機能が働いていたことを指摘出来る。

(2) 認知度と使用環境度による記銘への影響

次に、記憶の3要素のうちの一つである、情報を取り込む記銘というシステムにおいて、その情報に対する認知度と、その情報を使用する環境がどのような影響を与えるのかを分析する。

今回、アンケート内で行ったテストを①認知度②使用環境度の2つに分けて集計したものが上記の表7である。それぞれテスト内で「知っている」「使用している」と答えた回答者数を集計した。

3回のテストから、記銘と認知度との関係については認知度の高いものが記銘されやすいという関係を読み取ることが出来る。また、使用環境度については、あまり高くないものであっても記銘される場合がある点も示されている。

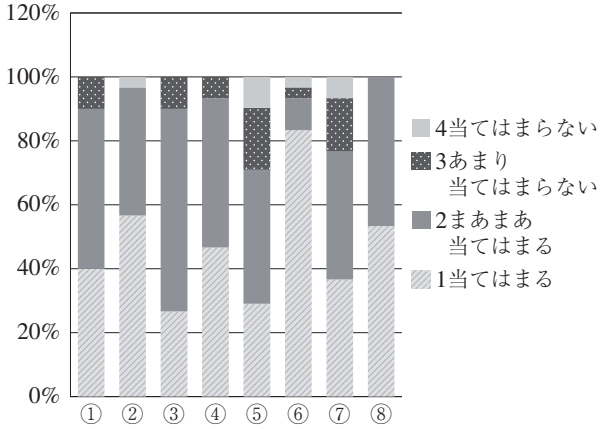
認知度の高いものの方が記銘されやすいという点は、仮説の根拠①として指摘した「標準語よりも地域言語の方が記憶しやすい」から派生するものである。すなわち、日常的に触れている地域言語の方が、標準語よりも記憶・記銘される可能性が高いということである。上記の分析結果は、この仮説が正しいことを改めて示したものであろう。

第2節　地域言語と親しみやすさ

次に、地域言語と親しみやすさについてのアンケート結果を示したい。各設問の内容は以下である。

①地域言語は良く喋る方だ
②地域言語が好きだ
③教育において地域言語を取り扱うことは必要であるか
④地域言語を授業に取り入れることに賛成である
⑤標準語化によって地域性は失われるか
⑥自分と同じ地域言語を話す人に親しみが湧くか
⑦自分と違う地域言語を話す人に親しみが湧くか
⑧地域性を出すために地域言語は必要不可欠である

調査は上記8つの設問を行い、それに対して1. 当てはまる、2. まあまあ当てはまる、3. あまり当てはまらない、4. 当てはまらない、の4つの選択肢を用意し、回答してもらった。グラフ1は、当該設問の集計結果である。



グラフ1　設問への回答集計

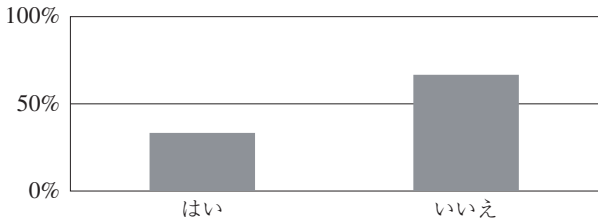
本質問において、⑥及び⑦の設問の回答が注目に値する。この2つの設問に対する回答を分析すると、比較的どちらも1. 当てはまる、2. まあまあ当てはまる、の回答が多く、自身が所属する地域の言語、もしくは自身の所属とは異なる言語に対しても、地域言語であれば一定の親しみを感じさせるものであることが分かる。次に、⑥と⑦の比較では、1. あてはまる、2. まあまあ当てはまる、の2つの選択肢への回答率の差が極めて顕著であることが分かる。

前頁に、⑥と⑦の設問に対する回答を百分率で表した表を表8として添付している。⑥自分と同じ地域言語を話す人に親しみが湧くか、についての回答は1. 当てはまる、という回答が80%を超えているのに対し、⑦自分と違う地域言語を話す人に親しみが湧くか、については1. 当てはま

る、2. まあまあ当てはまる、のそれぞれに分散され⑥への回答のような高い数値を示していない。先行研究の分析でも述べたが、地域言語を用いてそれぞれ各自のアイデンティティの確認を行っているということが、今回の結果においても強く反映されたことが分かる。

第 3 節　標準語化と地域性

次に、標準語化への認知度、地域性と地域言語との結びつきについての設問をし、その回答も分析した。結果を示したものがグラフ 2 である。



グラフ 2　「標準語化が進んでいることを知っているか」への回答結果

質問は「標準語化が進んでいることを知っているか」である。回答は、半数以上の 67% が「知らない」と答えた。この結果とグラフ 1 を関連させて分析すると、⑤標準語化によって地域性は失われるか、⑧地域性を出すために地域言語は必要不可欠か、という設問がキーになる。本質問に対して回答者は、⑤に対しては、2 の「まあまあ当てはまる」が 42% と最も高く 1 の「当てはまる」が 29%、3 の「あまり当てはまらない」が 19%、4 の「当てはまらない」が 10% と続いた。すなわち、半数以上が標準語化によって地域性が失われると回答しているが、標準語化自体に対しては、それほど危惧感を持っていないことが分かる。ここから以下 2 点を指摘出来る。第 1 は、回答者は標準語化についてあまり認知しておらず、同時に本現象をあまり深刻に考えてはおらず、それが地域性を失うことに繋がっていない、といった認識であることである。第 2 は、地域性や地域文化の核は地域言語以外にも存在するため、言語が標準語化されることで地域性が失われるとは考えていないという点である。

次に⑧の回答を見てみよう。これに関してはすべての回答者が選択肢 1 と 2 を回答しており、今回のアンケートだけに関して言えば、すべての人が地域性を出すためには地域言語が必要不可欠である、と考えていることになる。この回答を踏まえたうえで先に述べた標準語化の問題点を分析すると、標準語化と地域的特徴の関係を全く考えていないわけではなく、やはり言語を文化の核と捉えている可能性もあろう。

第 5 章　地域言語の潜在可能性

以上から、本研究の結論として地域言語の以下 3 つの潜在可能性を指摘したい。第 1 は、「標準語よりも地域言語の方が記憶しやすい」点である。既に示した通り、アンケート調査を通して人は個々人が使用している地域言語だからと言って、一概にその地域言語が最も記憶しやすいものであるとは言えないことである。

今回行ったテストでは、そのほとんどが正答率としては京都府の地域言語となってしまっていた。これは今回使用した京都府の地域言語が回答者にとって連想を生起しやすいものであったためであるが、その人が使用していない地域言語であっても連想を生起しやすい言語であれば、記憶しやすい、となってしまうためである。

また、回答傾向については、認知度が高いものについてはやはり記銘しやすいという傾向はうかがえたものの、使用環境度と記銘の関連性は深くは見いだせず、過去に少ししか聞いたことのないものでも、印象が強いものであれば、良く使用していない言葉でも記銘するという結果であった。これらの結果から、今回は「標準語よりも地域言語の方が記憶しやすい」とは言えなかった。しか

し、頻繁には使用していない言葉でも印象が強ければ記銘する傾向があるという結果は一つの可能性を見出した。それは、あまり馴染みのない地域言語であっても、印象が強ければ人々の目にとまり、情報を読み取ってもらえる、ということである。つまり、印象の強い地域言語は、あまり馴染みのないものであっても、一定の宣伝効果を創出するのである。しかし、地域言語が宣伝効果を創出するためには、多少は耳にした言葉である必要があるという制約はあるけれども、宣伝効果は大変高い可能性がある。

このような効果は、広告のキャッチコピーだけでなく、教育現場で学級経営や授業をする際にも効果がある。地域言語を使用することで、児童に重要な情報を効果的に教授、発信することも可能であろう。例えば、今回挙げた北海道の地域言語である「とても」という意味を表す「なまら」という地域言語を事例としよう。この言葉を使用して、児童に守って欲しい大事な点や、学習内容で大変重要なところには、「なまら大事」や、「なまら重要」等と赤いチョークで書き記すことで、情報を読み取りやすく、なおかつ印象付けを行うことが可能かもしれない。

また、自らが所属する地域の言語はもちろん、すでに述べた通り、使用していない地域言語であっても、一定の親しみのイメージを付加する。今回の結果は、対人の場合における地域言語のイメージ付加作用について述べたが、もしかすると、学習内容にも親しみのイメージ付加作用があるかもしれない。しかし、普段使わない地域言語を使用する場合は、児童にある程度その言葉の意味を教えておく必要がある。なぜなら、いくら印象的な地域言語であっても、認知度が低ければ記銘される可能性が低いからである。

第 2 の地域言語が内在する潜在可能性は「地域言語は相手に親しみを与える」点である。本研究において、今回のアンケート回答者と同じ地域言語を話す人と同様、回答者と違う地域言語を話す人に対しても一定程度親しみのイメージが付加されることが確認された。もちろん、両者を比較した場合、前者に対して強く親しみを感じることは明らかである。これは先行研究の分析でも述べたように、それぞれのアイデンティティを確認するために用いられているためと考えられる。

今回の分析結果は、地域言語における対人へのイメージ付加作用にのみ限定されている。先にも述べたように、対物へのイメージ付加作用があるかもしれない。今後は対人のみならず、対物などへの影響も考慮し、研究していくことで地域言語の新たな潜在可能性を見出せるようにしたい。

第 3 は、「標準語化によって地域性が失われる」点である。本研究では、標準語化によって地域性が失われること、地域性を出すためには地域言語は必要不可欠である、という結果が出た。しかし、標準語化についての認知度はまだまだ低いものであり、回答者は地域言語がなくなってしまうこと、地域性の喪失についてはほとんど危惧感を持っていないようであった。

今回のアンケート調査において「なぜ、その言葉が一番印象に残ったと思いますか」といった設問に対してはテレビなどで聞いたことがあるから等の意見もあり、共通語化が TV やラジオなどのマスメディアを介して、推進され、標準語化が促されていることが伺える。共通語化が陰で推し進められ、それに気づかず、危惧感を持っていない状況にあることはとても危険な状況である。そのような中、今回のアンケート内において、「地域言語が好きだ」「教育において地域言語を取り扱うことは必要であるか」「地域言語を授業に取り入れることに賛成である」といった設問に対し、ほとんどの学生が 1. 当てはまる、2. まあまあ当てはまる、の 2 つの選択肢に回答してくれた点は興味深い。回答してくれた学生のほとんどが教育福祉学部の学生であることも関係している可能

性はあるが、将来教職を目指す学生がこのような回答をしてくれたことは一定の価値があると言えるだろう。

地域言語学習は、地域によってほとんど学習が行われない場合がある。また、学習の場が設定されていても覚えていない場合もある。今回の研究結果は、地域言語学習の重要性の指摘はもちろん、学校現場における地域学習の方向性を示している。各地域、及び各学校において、固有の地域性を内包することで、地域に根付いた教育実践を行うことが出来るのではないだろうか。引き続き地域言語の研究が盛んに行われることは、地域言語の潜在可能性を見出すだけでなく、共通語化等により地域言語や地域性が喪失されることを食い止め、地域に根ざした学習内容、及び新しい公共を創出することに繋がるだろう。

（追記）

本論文の作成に当たり熱心に指導してくださった指導教官の田中伸先生、記憶を取り扱うきっかけを下さり、親切にアドバイスをしてくださった農野寛治先生、アンケートの実施に際して貴重な時間を割いて協力してくれた大阪大谷大学3・4回生30名、その他協力して下さった方々、皆様に心からの感謝の気持ちを記したい。なお、本論文は、卒業論文を短縮し、再構成したものである。データの詳細、及び言葉の定義等の詳細については、卒業論文をご参照願いたい。

注

1）早野慎吾「国語科教育における地域言語教育(1)：方言・標準語・共通語」、宮崎大学教育文化学部紀要『教育科学16号』、2007年、pp.137–p.138参照
2）真田信治『標準語の成立事情』1987年。
3）真田信治『方言は気持ちを伝える』岩波書店、2007年、p.45参照
4）佐藤和之・米田正人『どうなる日本の言葉　方言と共通語のゆくえ』大修館書店、1999年、pp.4–p.11参照
5）前掲1、pp.44–p.46参照
6）シオラン『告白と呪詛』紀伊國屋書店、2000年出典
7）小池保「『地域言語』の潜在的可能性」、『尚美学園大学芸術情報学部紀要　第19号抜刷』2011年、pp13–p.14参照
8）アラン・バッドリー『カラー図説　記憶力－そのしくみとはたらき』誠信書房、1988年、pp.25–p.37参照
9）同上、pp 59–p.60参照
10）同上、pp 26–p.27参照
11）同上、pp 27–p.30参照
12）同上、pp 43–p.44参照
13）猪木省三『記憶における検索手がかりの機能に関する研究』風間書房、1995年、p.2参照
14）前掲2、p.5・10・36参照
15）前掲3、pp.109–p.115参照
16）同上、p.108参照
17）備前徹「母語に対するイメージと外国語に対するイメージ－標準語と方言－」『志賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学・教育科学　No.45』、1995年、pp 178–p.179参照
18）早野慎吾「方言コンプレックスのメカニズム」、『Ars Linguistica, 12』2005年、pp.89–p.97参照
19）同上、p.188参照
20）松田美香「大分県方言はどのように変わってゆくのか－ことばの変化と方言イメージとの関係を考える－」、『別府大学短期大学部紀要　第18号』、1999年、pp 37–p.41参照
21）吉田祐記「地域資源としての方言とその本来のあり方に関する研究」2007年、東京工業大学工学部論文発表会資料、参照

参考文献

エンデル・タルヴィング、『タルヴィングの記憶理論－エピソード記憶の要素－』教育出版、1985年
猪木省三、『記憶における検索手がかりの機能に関する研究』風間書房、1995年
中井精一、『都市言語の形成と地域特性』和泉書院、2012年
山下富美代、『記憶力をつける』日本経済新聞社、1997年
D. A. ノーマン、『認知心理学入門』誠信書房、1974年
長町三生、『認知心理学講座4　言語理解』海文堂出版株式会社、1990年
田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代－ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店、2011年

真田信治、『大阪のことば地図』和泉書院、2009 年
徳川宗賢・真田信治、『関西方言の社会言語学』世界思想社、1995 年
陣内正敬・友定賢治、『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院、2005 年
早野慎吾、「国語科教育における地域言語教育（2）：方言の役割について」、宮崎大学教育文化学部紀要『教育科学 17 号』2007 年
平澤洋一、「若年層に見る日本文化」、『広島大学国際センター紀要（1）』2011 年
菊澤律子、「第 4 章　標準語化と言語の消滅－地域言語の特徴とその歴史言語学的研究における価値－」、飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』国立民族学博物館調査報告、2012 年
近藤紗耶「若年層の方言使用と方言意識」『東京女子大学言語文化研究（Studies in Language and Culture）19』2010 年